
DAETHJOKER

緋糸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEATH JOKER

【Nコード】

N0557J

【作者名】

緋糸

【あらすじ】

何人殺しても罪にならない存在『DEATH JOKER』を巡るストーリー。

『DEATH JOKER』である人造人間の少年と、家族の復讐を誓った少女の二つの視点で物語が展開する。人と関わっていく内に、二人は何を見つけたのか。

この手の物は初挑戦なのでがんばります。

原点 零

其処は城だった。

純洋風のその建物は白く輝き、庭園には四季折々の花が咲き乱れている。

更に、黄昏時のこの時間がより一層美しさを引き立てていた。

そんな城の中、一人の少女が長い廊下を微笑を浮かべ歩いていた。

少女は洋館には不似合いなセーラー服を着用し、腰に刀を差している。

まだあどけなさの残るその顔には爛々と殺意が燃えている。

少女の目的はただ一つ。

この神条院家しんじょういんを滅ぼす事だけだった。

「喜劇のはじまりはじまり、ですう」

少女——綾部英羅あやべえいらは、何の躊躇いもなく城に火を放った。

それからの光景はまるで地獄の様だった。

赤々と燃える炎から半狂乱になって逃げ惑う家人達を次々と斬っていく。

その表情には恐怖と、何より驚愕が深く滲んでいる。

斬ろうとする瞬間には皆、口を揃えて言った。

「何故、貴女様が!?!」

少女はその質問には答えず、無表情に刀を振り下ろす。

一つ、また一つと鮮血の花が咲いていった。

城の住人をほぼ皆殺しにした事を確認すると、少女は満足気に微笑んだ。

そして、城の最上階へと足を運ぶ。

一番奥にある部屋のドアをノックすると、小さな悲鳴が返ってきた。ゆっくりと、ドアを開く。

「失礼するですう」

「え、英羅……………お前は、」

「ええ？いつ発言を許すって言いましたっけえ」

中に居たのは中年の男性だった。

油っぽい顔には冷や汗が流れ、体はガタガタ震えている。

少女は小さく舌打ちした。

こんな男のせいで、自分は全てを失った。

こんなにも弱く、惨めな奴にさえ自分は何も出来なかった。

そんな思いが吐き気を催したが抑え、努めて冷静に口を開いた。

「貴様の家も家族も、綾部が全部壊しましたあ。ご感想は？」

「……………何が、気に入らなかったんだ……………」

「はい？」

男は壊れた様に笑い声を上げ、少女に縋った。

「何が気に入らなかったんだ！？お前の望むものは全て、全て与えた！この家も、服も！玩具も！何が足りないんだ？さあ言ってごらん、さあ言って！」

男の饒舌は止まらない。

「俺は！お前の事を真に娘と思っていた！なのにお前は何故、こんな事をつ……………」

男は涙を流し始めたが、そこに同情など沸く筈もなく、ただ少女は怒りに震えていた。

皆、口を揃えて「何故」と言う。

それが何よりも耐え難い屈辱だった。

自分にされた事は、たった数年で忘れてしまう程のちっぽけな物だったのか。

そんな訳がない。少なくとも、自分にとっては。

城に居た奴等全員がその程度の人間だったと思うと、寧ろ自分の行いが正しい事のように思えてきた。

だから、この人間にも刃を向ける。

当然の事だった。

「貴様のその安っぽい命一つで、許されるんです。こっちは感謝して欲しいくらいですよ」

「ま、待ってくれ。い、いい命だけは！」

ヒュッと風を切る音がした。

綾部英羅はたった一人で神条院家を滅ぼした。

原点 - 1

元は研究所だったそこは跡形もなく破壊され、働いていた研究員達が積み上げられている。

少年はそんな屍の山の上に立っていた。

別に壊すつもりはなかった。

ただ、自分の身元を明かすと研究員達が目の色を変えて襲ってきたから自己防衛しただけだ。

特に気力が湧かないので夜空を見上げながらぼんやりとしていた。

此処の研究所は何と言っても弱かった。

自分が「切札」である事を差し引いても弱い。

同じ科学者でも違う物だなど、改めて実感する。

あの人ならば。

あの人？

自分の中に浮かぶあの方は、最低最悪の人間だった。

それは多分今でも変わらないだろう。

「……………帰る」

沢木蓮一は屍の山を後にした。
サウキレンイチ

対面 - 2

ド田舎にある小さなボロアパートが沢木蓮一の帰る場所だった。町は寂れ、人々の目に活気はない。

自転車で十五分ほど行ったところにコンビニらしきものがあるにはあるが、お世辞にも品揃えが良いとは言えない。つまり、典型的な過疎地だった。

しかし利点もあった。

静かだし、何より煩わしい人間関係が無い。特に利便性を求めるわけでもない蓮一にとって、ここは理想的な場所だった。

怖いくらいグラグラになった階段を歩く。

時刻は午後二時。真っ暗で、手すりなど付いていない階段は足元に注意をしなければ落ちてしまいそうだった。

眠たい目をこすりながら、一番奥にある自分の部屋を目指す。早く布団に包まりたい…。

その一心で彼は、自室の扉を開いた。

ドンドンと、凄い勢いでドアが叩かれていた。

「んだよ……うるせえな……」

ぼんやりした頭で身体を起こし窓を見ると、太陽はもう随分高く昇

っていた。

どうやら昼まで眠っていたらしい……のは別にいいが、さつきから近所迷惑とか全く気にしていなさそうな勢いで自室のドアが叩かれているのは由々しき事態だった。

一瞬自分に来客かとも思ったが、まさかそんなわけは無い。

じゃあ借金取り、家賃の催促、あるいは……

「…殺し屋か？」

借金も家賃滞納もしていない自分にとって、その物騒極まりない可能性が一番高かった。

小さく舌打ちをし、音をたてないように起き上がる。

近くにあった包丁を持ち、ゆつくりとドアに近づく。

つまりは殺られる前に殺れ作戦だ。

今もなお、ドアを叩く勢いに疲れは見えない。

凄い体力だな……と感想を持ちながら。

一気にドアを「え？」開けて、

「……はい？」

そこにいたのは少女だった。

それも、自分と同じくらいの歳の。

真っ直ぐに伸びた黒い髪は肩の所で切りそろえられており、同じく黒い目をぱちくりさせている。

顔立ちは中々に美人だった。

流行とかあまり気にしていなさそうな普通の服を着用し、腕に菓子折りを抱えている。

「あの……手」

「へあ？」

あまりの予想外さに間の抜けた声を出してしまった。

手……自分の手には包丁が握られており、それを少女の喉のギリギリの所に突きつけていた。

「あ……悪い」

「いえ……」

少女は一瞬怪訝な顔をしたが直ぐに笑顔に戻り、口を開いた。

「隣に越してきた綾部という者ですう。以後お見知りおきを」

そう言つて菓子折りを渡してきた。水羊羹……食べたことない。しかし、こんなド田舎にわざわざ引越しか。珍しい。

「ああ……俺は沢木蓮一だ。よろしく」

社交辞令として手を差し出したが、少女……綾部からの反応はない。ちらりと顔を見ると、とびっきりの笑顔でこう言い放った。

「いえ、必要以上に馴れ合うつもりはありませんからあ」

「はあ？」

「あ、お気に触りましたあ？」

ごめんなさいと、全く悪びれた様子のない綾部に軽く殺意が湧いた。

なんなんだこの女。礼儀知らずにしても度が過ぎている、どういう教育受けてきたんだ。

不穏な空気を感じ取ったのか綾部はさつと踵を返し、隣の部屋に入ってしまった。

やり場の無いイライラをどう解消したものかと菓子折りを眺めながら考えていると、ふとある事に気付いた。

あの女、包丁突きつけられたっていうのに全く動じなかったな……。

これが沢木蓮一と綾部英羅の出会いだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0557j/>

DAETHJOKER

2010年12月18日14時09分発行